



学校だより

深谷

令和5年8月28日

8・9月号

横浜市立深谷小学校

<https://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/fukaya>

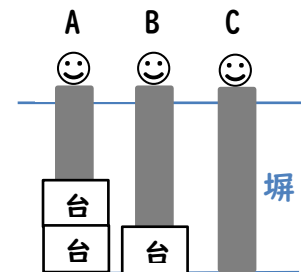
多様性の尊重

校長 石原 加代子

学校に子どもたちの笑顔が戻ってきました。夏休みには、好きなことに挑戦したり、学年や個に応じて端末の使い方を選択して家庭学習に取り組んだりしたことでしょう。保護者の皆様におかれましては、課題の取組などへのご協力に心より感謝申し上げます。

夏休み期間は、教職員にとって貴重な自己研鑽の機会です。じっくりと時間をとって特別支援教育研修や道徳等の校内研修をしたり、各教科等の教育課程協議会や選択研修に参加したりしました。夏休み後の教育活動に活かしていきます。

様々な研修では、児童の資質・能力を育成するには「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実が求められることを再確認しました。自主的・自立的な学習者の育成を目指し、「個別最適な学び」では、一人ひとりが自ら学習を調整して、学習内容の確実な定着を図ったり、学習を深めたり広げたりします。「協働的な学び」では、他者と協働して異なる考え方が組み合わさり、よりよい学びを生み出します。両者の一体的な充実が「主体的・対話的で深い学び」を実現し、子どもたちを大きく成長させます。私たち教職員は適切な支援ができるように、多様な子どもの教育的ニーズに応じて「合理的配慮」をしたり、学校全体で共通理解を図って組織的な校内支援体制を整えたりしています。「合理的配慮」をわかりやすく表すと、右図のようになります。A、B、Cの背の高さが違う3人が塀の向こうを見ようとする場合、Cは台を必要としませんが、AやBは背の高さに合わせた台があることで3人が平等に塀の向こうを見ることが出来ます。台は必要な支援のことです。人はみな違うのが当たり前で、必要な支援も異なり、学び方も違います。台を使っておかしいとは感じないように多様な支援や学び方をおかしいとは感じないでしよう。



ある講演会で、「歌いたくなると、どこでも勝手に歌ってしまう自分の唇が嫌い。絵を描きたくなったら勝手に動いてしまう自分の手が嫌い。」と思っていたという話を聞き、衝撃的でした。ある先生との出会いによって自分のことが好きになり、友達にも個性を認められて肯定的な見方変わったそうです。また、的確な支援で苦手だった音読が楽になり、学習が楽しくなったとのことでした。本校に自分を嫌いと思っている子どもはいないか、私たち教職員は子どもたちの困難さを見落としていないだろうかと心配になりました。

客観的なデータの分析や個の見取りによって最適な支援を工夫し、子どもたちが自分に合う学び方で自己調整しながら自立的に学べるようにし、誰一人取り残さない学びを実現するように努めていきます。「多様性」を尊重し、違いを楽しみながらお互いにそれぞれの個性を受け入れ、自分も友達も、もっともっと大好きになってほしいと思っています。

猛暑や生活のリズムの変化による心身の不調や不安があるかもしれません。登校時には、学援隊の方々が励ましてくださっていることがあります。少しずつ学校生活のリズムを取り戻したいと思います。保護者や地域の方々との連携が大きな力になります。引き続き保護者の皆様、地域の皆様のご理解とご支援を賜りますようお願いいたします。